

世界の人びとのための JICA 基金活用事業

終了時活動報告書（2024 年度採択案件）

1. 業務の概要	
(1) 案件名	ラオスにおける安全安心な出産のための医療人材育成プロジェクト
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人あおぞら
(3) 実施期間	2024 年 12 月 1 日～2025 年 11 月 30 日
(4) 実施国	ラオス人民民主共和国
(5) 活動地域	ビエンチャン都・ビエンチャン県トゥラコム郡 ラオス・首都ビエンチャン ラオス科学保健大学、チルドレン病院 ラオス・ビエンチャン県 ビエンチャン県病院、トゥラコム郡病院
<p>(6) 活動概要</p> <p>①活動の背景 :</p> <p>ラオスは ASEAN 加盟国唯一の内陸国であり、国土の約 7 割が高原や山岳地帯であるため、山岳部ではインフラが整っておらず、医療サービスへのアクセスも困難な状況にある。これが影響し、ラオスの平均寿命は 67 歳と短く、妊産婦死亡率と新生児死亡率は東南アジア地域の中でもとりわけ高い。新生児死亡の原因の 29% は新生児仮死であるといわれている (WHO, 2015)。</p> <p>新生児仮死とは、生まれたばかりの新生児が呼吸、循環、中枢神経系の不全状態に陥ることをいい、低酸素による臓器障害へと進展する可能性がある。これを防ぐため、医師や助産師・看護師が出生直後の適切なタイミングで適切な処置を行う必要があるが、日本の医師・助産師が多く在籍するあおぞらは、この手法「新生児蘇生法」を開発途上国の医療従事者に伝える活動を続けており、ラオスでも 2019 年から講習会を実施してきた。</p> <p>2022 年には「世界の人びとのための JICA 基金活用事業」として、ラオス国内の医師の育成機関である国立ラオス保健科学大学からの協力依頼を受け、新生児蘇生指導者候補者（小児科医、産科医）に対し指導者養成研修を定期的に開催した。成果として、新生児蘇生法を医学生及び医療者に指導できる人材を 10 名育成することができた。事業終了 1 年後にヒアリングを行ったところ、医学生及び医療者に対して新生児蘇生法の指導をすでに実践したという指導者が 8 人いた一方で、新生児蘇生法を実地で指導する機会が少ないと答えた指導者も 2 名いた。</p> <p>また、同ヒアリングより、首都隣県の郡立の病院は、新しい技術や指導方法が導入されづらく、紹介されたとしても定着しづらいという課題を抱えていることが確認できた。例えば、JICA 海外協力隊で</p>	

助産師として郡病院で活動したことがあるあおぞらアドバイザリースタッフ（本事業の業務責任者）によると、郡病院には JICA 母子手帳が導入されているが、通院する妊婦がもつ母子手帳には、採血や超音波検査結果や妊婦健診担当の医療者（医師、助産師、看護師）からの指導履歴が記録されていなかったという。母子手帳には妊娠期や児の成長の過程で注意すべきことが記載されているが、それも十分に参照されていないようだった。

あおぞらおよび本事業が目指す安心安全な出産のためには、新生児蘇生法を実践できる医療者が増えるだけでなく、出産時の母児のリスク予測が十分にされていることが必要である。異常の早期発見、早期対応ができれば、母児や家族がより良い状態で出産に臨むことができるからだ。

これらの事前調査・ニーズ分析を踏まえ、あおぞらは 2022 年に実施した事業の追加・発展的な活動として、事業実施を計画した。ラオス科学保健大学およびトゥラコム郡病院とも意見交換を行い、協働で事業を行った。

②活動の目標 :

1. 先行事業で養成したラオス科学保健大学教員の他医療者に新生児蘇生法を指導する能力が維持・強化される。
2. トゥラコム郡病院の母子保健担当医療者（医師、助産師、看護師）が、妊産婦の異常を早期発見し、妊産婦および新生児に適切なケアを行えるようになる。

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

日程	活動内容	場所 (病院)	参加人数(人)			
			(受講生以外にラオ人指導者含む)			
2025年			国立病院	県病院	郡病院	診療所
① 2/27	妊娠・出産についての講習会	郡			8	3
② 10/15	新生児蘇生法指導者向けフォロー アップ講習会	国立	13 (先行事業で の養成者)			
③ 10/16	新生児蘇生法講習会	県	4 (全員②受講 者)	7	8	
④ 10/17	妊娠・分娩についての講習会 新生児蘇生法実技トレーニング	郡			5 (内2名③ 受講者)	8

合計 56人(延べ人数)

上記内容について以下に実施内容の詳細を記載する

1. 新生児蘇生法フォローアップ講習会

- ・ 日時：2025年10月15日
- ・ 場所：チルドレン病院
- ・ 目的：先行事業で養成された指導者が、インストラクション・チームワークについて理解でき、実践できる
- ・ 参加者：先行事業で養成した指導者と指導者として活動している医師13名
- ・ 講師：日本人専門家（あおぞら嶋岡医師、柳医師、大川医師、久野医師）
- ・ 内容：・インストラクション・チームワークについての講義
・シミュレーション・チームワークトレーニングなどの実技

ラオスで活動する医療隊員に、主にラオ語での説明に協力していただき、現隊員の活躍があった

2. 地方病院での新生児蘇生法講習会（実地指導）

- ・ 日時：2025年10月16日
- ・ 場所：ビエンチャン県病院
- ・ 目的：・先行事業で養成された指導者が、新生児蘇生法フォローアップ講習会を活かして実地指導できる
・ビエンチャン県で従事する医療者が、新生児蘇生法を理解し実施できる
- ・ 参加者：ビエンチャン県の周産期に関わる医療者15名（ビエンチャン県病院7名、他8名はビエンチャン県内の4つの郡病院から各2名ずつ）（医師8名、助産師4名、看護師3名）
- ・ 講師：ラオス人指導者4名（10/15に講習会に参加した養成した現地指導者）
- ・ スーパーバイザー：日本人専門家（柳医師、大川医師）
- ・ 内容：新生児蘇生法講習会（概論講義、実技演習、シミュレーショントレーニング）

3. 郡病院での妊婦・分娩についての講習会、新生児蘇生法実技トレーニング

- ・ 日時：① 2025年2月27日 ② 2025年10月17日
- ・ 場所：①②トウラコム郡病院
- ・ 目的：① トウラコム郡病院や診療所の医療者が、妊婦のリスク管理について理解しケアを実践できる
② トウラコム郡病院や診療所の医療者が、妊婦のリスク管理やケアについて復習し、産婦の管理について理解、実践できる
- ・ 参加者：
 - ① 郡病院医療者 8名（トウラコム郡病院 3名、他郡病院 1名） 診療所医療者 3名
医師 5名、助産師 2名、看護師 1名
 - ② 14名（トウラコム郡病院 5名、4つの診療所から各 2名ずつ 8名、1つの診療所から 1名）
医師 1名、助産師 3名、看護師 10名
- ・ 講師：
 - ① 日本人助産師（あおぞら武田春佳）
 - ② 日本人助産師（あおぞら武田春佳、萬谷恵実、橋爪亜希、寺沢奏瑛）、日本人専門家（柳医師、大川医師）
- ・ 内容：
 - ①
 - ・ 現地調査、母児手帳を用いた妊娠期の異常の早期発見早期対応方法についての講義
 - ・ カードゲーム、シミュレーショントレーニング
 - ②
 - ・ 母子手帳を参考にした妊産婦の正常な経過
 - ・ 異常の早期発見早期対応方法の講義
 - ・ カードゲーム、シミュレーショントレーニング
 - ・ 日本人専門家とともにビエンチャン県病院で新生児蘇生法講習会参加した郡病院医療者による新生児蘇生法実技トレーニング

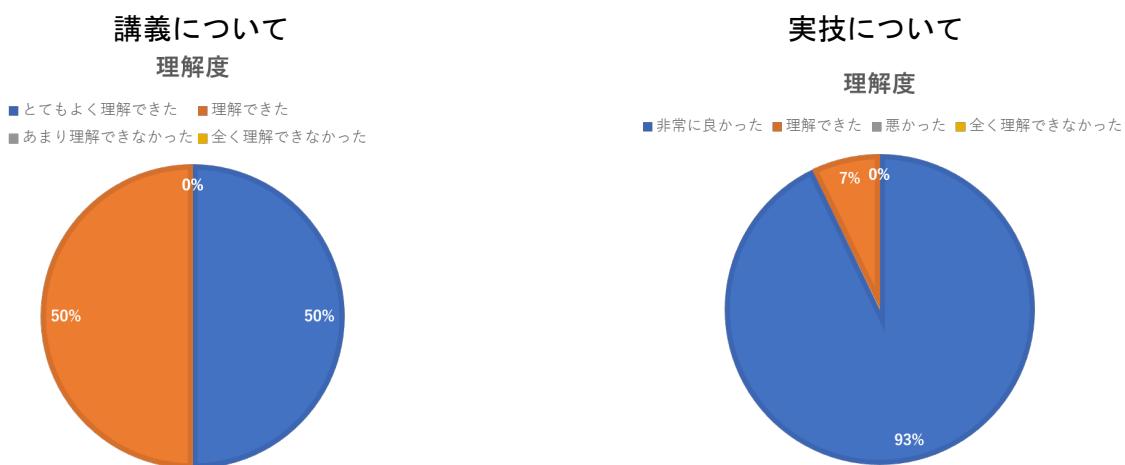
(2) 実施成果 :

1. 新生児蘇生法指導者フォローアップ研修受講後の県病院での新生児蘇生法講習会の実施について 【ラオ人指導者】

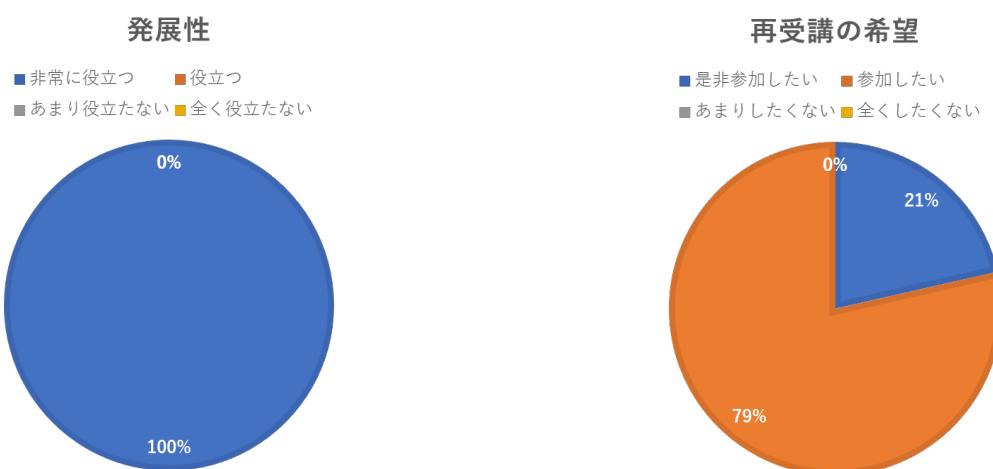
新生児蘇生法指導者フォローアップ講習会に参加した指導者 4 人がビエンチャン県病院での講習会を実施した。その 4 人から、講師として教え方を学び、学んだことを活かすことができた、講習会を実施する自信がついた、ビエンチャンでのレクチャーを受けた翌日にインストラクターとして実際に日本の医師に見守られながら実践できてよかった、学んだことを今後も県病院や郡病院で実施したい、という感想が聞かれた。

【参加者から】

研修後アンケートの結果より、講義を「理解できた」が全体の 100%であり、そのうちの半数が「とてもよく理解できた」という結果になった。また実技トレーニングについては 93%が「とてもよく理解できた」と回答していた。



実際の新生児蘇生に役立つかについて、「非常に役立つ」という回答が 100%であり、実践に即した講義であったこと、今後に実践に活かしたいと考える医療者が多くいたことがわかる。再受講については「参加を希望する」が 100%を占め、国立病院の新生児蘇生法指導者の研修を定期的に受けたい、もっと研修時間を長くしてほしいといった前向きな意見が聞かれた。



以上から、

「1. 先行事業で養成したラオス科学保健大学教員の他医療者に新生児蘇生法を指導する能力が維持・強化される」という目標に対して、積極的に活動する新生児蘇生法指導者は以前より増え、新生児蘇生法指導者フォローアップ講習会で指導方法を学び、それを活かして自信をつけて受講者にとって満足度の高い講習会を実施することができた。また、今後もそれを活かして新生児蘇生法講習会を地方へも広めていきたいという意欲がある。よって、指導能力の維持向上が図れたと考える。

2. 郡病院での研修について

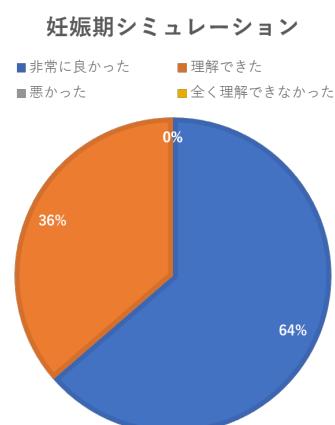
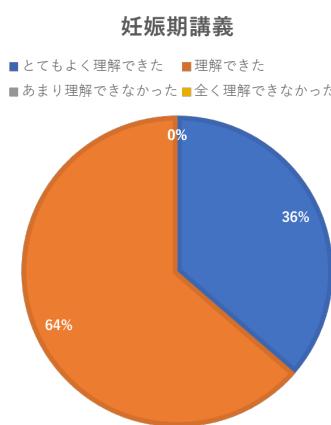
第1回郡病院での現地調査から、県病院への搬送基準や母子手帳の使用状況、妊婦健診や分娩時の対応、物品の状況について確認した。

第1回、2回共に、郡病院での妊産婦のリスク管理の講習会について、郡病院医療者だけでなく診療所からも参加があり、幅広い対象に指導を行うことができた。

講習会後アンケートの結果では、妊娠期分娩期のそれぞれの講習、シミュレーショントレーニングとともに「とても理解できた」「理解できた」で100%となり、リスクに対する準備や妊娠・分娩時の評価を学べた等の意見があった。

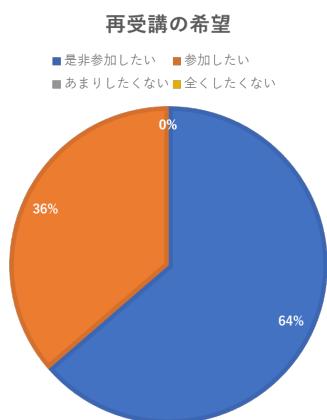


妊娠期の研修は第1回と2回の両方で実施したが、妊娠期のシミュレーショントレーニングの理解度のみ、「とても理解できた」が「理解できた」を上回り、全体の64%を占めた。



ここから、講習会により理解が深まり、同じ内容で繰り返しの講義は、より理解度を上げることが分かった。

再受講については「参加を希望する」が100%を占めた。



もっと時間を使ってもっと練習をしたい、という今後に対する意欲的な意見が聞かれた。

また、学んだことを今度は自分が診療所を含めた医療者へ教えていきたい、という意見もあった。

ゲームやシミュレーショントレーニングを通して、郡病院医療者が診療所医療者へ助言指導している様子も見られ、講習会が郡病院と診療所医療者のコミュニケーションの場となった。郡病院と診療所医療者の共通理解が増え知識技術レベルの差が少なくなれば、ビエンチャン県全体の医療知識や技術の向上に少し近づくのではないかと考える。今回はその一歩となつたと感じられた。

県病院の新生児蘇生法講習会に参加した郡病院医療者が、自施設の郡病院での講習会時に、日本人専門家と共に、自施設や診療所医療者へ新生児蘇生法の実技を指導した。

以上から、「1. トゥラコム郡病院の母子保健担当医療者（医師、助産師、看護師）が、妊産婦の異常を早期発見し、妊産褥婦および新生児に適切なケアを行えるようになる」という目標に対して、郡病院の講習会で郡病院・診療所医療者が、妊産婦のリスク管理、新生児蘇生法の実技について学びを深められ、今後の適切なケアの実施につながったと考える。また、今後自分が教えたい、学びたいという意欲は、より知識や技術を習得し、小さな村々にも妊産婦のリスク管理や新生児蘇生法を広め、安全な分娩につながると考える。

（3）得られた教訓など：

① 知識・技術の伝達

先行事業で養成された新生児蘇生法指導者で、実際に指導者として活躍する人が増え、その指導者が県病院で指導し、県病院で学んだ郡病院医療者が郡病院や診療所医療者へ指導する場に立ち合い、学んでいる姿を見た。小さな村々へ知識や技術が伝わり、それを実施できる医療者がラオス全体で増え、救われる命が増えていくのではないかという期待が、目の前の状況から感じられたことがとても嬉しかった。

② 最終目標

郡病院の講習会で、最新の母子手帳情報をラオス人医療者から教えてもらうことや、シミュレーショントレーニングで日本では考え付かなかつた状況設定にする等、ラオス人医療者から学ぶことがあった。そこから、ラオス人医療者同士で指導できることで、よりラオスの文化や家族背景、状況に合わせた実践につながると感じた。あくまで最終目標は、ラオス人が自分たちの手で医療の質を高めていくことで、支援はそのきっかけだと再確認した。

③ 医療の知識・技術や質の向上

以前は、郡病院での妊婦健診は決められたことをこなすのみ、ということが多い印象だったが、シミュレーショントレーニングで、患者が不安にならないよう声掛けしている姿や、夫を含めた家族への対応等、医療的な対応だけでなく看護ケアをしている場面があった。また、学びたいという意欲のある医療者が多く、医療者として従事してから進学し知識をつけて病院へ戻って従事している医療者が増えていた。講義をしていても、自分が隊員として活動していた7年前より格段に医療の知識や技術が向上し、助産師看護師が医療的な対応にとどまらず看護ケアまで行き届いているスタッフもおり、医療の質が改善していることを感じた。

④ 隊員の経験を通して

郡病院での講習会は、自分が隊員として活動していた任地、配属先での実施だった。当時ぶつかることも多くまた大きな成果は残せなかつたが、一緒に過ごしていたラオス人が迎え入れてくれ、協力してくれ、一緒に過ごした2年間はかけがえのないものだったと改めて感じ、関係性に感謝した。変わらないところと変わっているところに安心感や感動とともに、自分が隊員を終えて帰国した7年という年月の長さを感じた。

⑤ 目標達成のために必要なこと

講習会中の指導者の表情がとても優しくいきいきとしており、講習会に参加している医療者もとても一生懸命で楽しそうに学ぶ姿から、指導者も受講者も前向きに取り組んでいることを感じた。安全な出産で一人でも多くの命を守る、という目標を達成するには、そのための知識や技術、時間や制度等多くのものが必要だと感じるが、どのような状況でもより良くしていくには、気持ちが一番大切で、それが原動力だと感じる。そこに学ぶ楽しさや教えていく自信がつけば、それが実践へつながり、向上した医療の知識や技術が国全体へ広まっていくと考える。

関わったラオス人医療者の感想や表情、態度から、今回の事業でそれを行えた場面や人が多かったように感じた。

（4）今後の活動・フォローアップの方針：

① 講習会、学ぶ機会の継続

今後、引き続きラオスで講習会が行えるよう、新生児蘇生で使用されるマスクとバック、郡病院の妊娠・分娩の講習会で使用したキットを現地カウンターパート及び郡病院へ寄贈し、ラオス人医療者自身で今後も知識を深めていくようにした。キットを使って学んでいる様子や、マスクバックを使って練習している様子を写真で送ってもらう予定。

妊娠・分娩の講習会キットの一部を、活動に役立ててもらえるようラオスの現隊員に譲渡した。

② 小さな村々への指導、妊婦のセルフケア能力の向上

国立病院の医師だけでなく、郡病院医療者も指導することに意欲的であったことから、ラオス全体で守られる命がえるよう、首都からより遠い小さな村々の医療知識や技術向上のため、郡病院医療者のさらなる知識技術の向上とともに診療所の医療者や村の妊婦への指導を支援していくことも、今後の目標として挙げられる。

③ 安全に加え安心安楽のためのケア能力向上

今まででは、一人でも多くの命を守るため、職種に関わらず医師助産師看護師に疾患の知識や異常の早期発見、早期対応を重点的に指導していた。ラオスの医療知識や技術が向上していることから、今後はそれに加えて、助産師や看護師へ、看護・助産ケアについての指導を行い、妊娠婦や新生児へ、安全だけでなく安心・安楽のための医療を提供できることを目標に進めていくことも視野に入れたい。

上記の方針で活動を継続できるよう、資金調達に努め、年に1回～2回程度、定期的に専門家を派遣し、フォローアップ研修、指導を行っていく。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

新生児蘇生法指導者フォローアップ講習会参加者が、指導者として講習会でいきいきと指導し、参加者にとっても満足度の高い講習となったことから、フォローアップ講習が活かされ、また、それが自信につながっていることを感じた。

県病院の講習会に参加していた郡病院医療者が、郡病院での講習会で同施設や診療所の医療者に指導しており、学んだことを早速活かすことができていた。

郡病院医療者が診療所医療者に助言、指導する様子があり、郡病院の講習会を通して、郡病院医療者は学ぶ立場としてだけではなく指導者としても参加できた。

郡病院講習会で参加者が盛り上がり、笑顔で参加し、また、シミュレーショントレーニングと並列で新生児蘇生法実技トレーニングを実施することで、途中退出なく全員が講習会に取り組むという環境となった。

指導者、参加者ともに楽しそうな表情が多くみられたように思う。

(2) 活動の写真



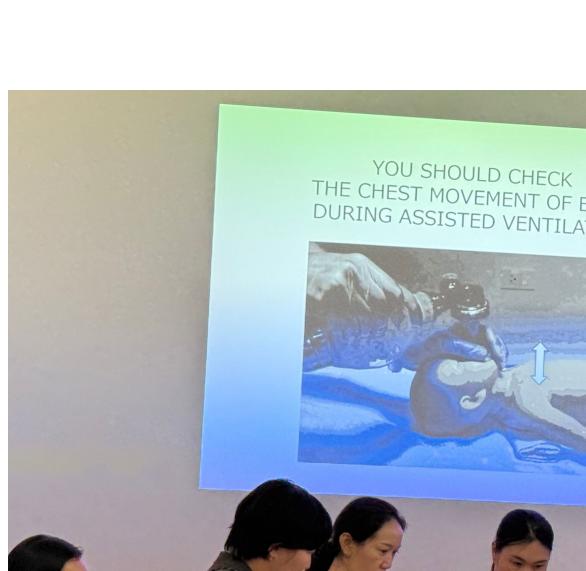
新生児蘇生法フォローアップ研修の様子① 全体講義



新生児蘇生法フォローアップ研修の様子② 日本人専門家によるグループでの実技トレーニング



地方病院（県病院）での新生児蘇生法講習会① ラオス人指導者による全体講義



地方病院（県病院）での新生児蘇生法講習会②
日本人専門家が見守る中ラオス人指導者によるグループでの実技トレーニング



郡病院での妊婦・分娩についての講習会、新生児蘇生法実技トレーニング①



シミュレーショントレーニングの様子

郡病院での妊婦・分娩についての講習会、新生児蘇生法実技トレーニング②



国立病院での新生児蘇生法
フォローアップ研修
○ 国立病院医療者 = 受講者



県病院での新生児蘇生法研修
○ 国立病院医療者 = 指導者
○ 郡病院医療者 = 受講者



郡病院での研修
○ 郡病院医療者 = 指導者
○ 診療所医療者 = 受講者

知識や技術が伝わっていく様子

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

先行事業を引き継ぎ、ラオスの安全な分娩のために事業を進めることができたと思う。国立病院の医師以外にも地方病院の医療者への指導や、新生児だけでなく妊産婦のケアを指導する等、対象や指導内容の幅が広がり、より安全な分娩のための取り組みができた。

当団体の理念は「すべての命が大切にされ、その人らしく生きられる社会」である。新生児の命を救う直接的な方法である新生児蘇生法能力の向上だけでなく、新生児や妊産婦ケア能力の向上は、命や家族の始まりを支援するもので、人生のスタートラインや母や父としての役割、その人らしく生きることを支持するものであると考える。今後も指導をしていきたいという医療者へのフォローアップも、その人らしく生きることにつながる。一人でも多くの命を救い、涙を止め、笑顔を増やしたいと同じ目標を持つメンバーで、それぞれが専門とすることや得意とすることを発揮し、お互いを、ラオス人やラオスの文化を尊重するメンバーだからこそ、良い雰囲気の中で今回の事業を行うことができた。どのメンバーが欠けても今回の事業は成し得なかった。また、団体のチームワークが高まり今後の活動の意欲にもつながった。

当団体には元協力隊が多く在籍するため、JICA 基金活用事業では近い価値観や価値観の共有が行いやすく感じた。また現在現地で活動する隊員とのつながりもあり、当団体の活動を現隊員と協力する等、ラオスでの活動を今後につなげることができた。

当団体がラオスで活動し、現地の医療者へ知識や技術の提供、必要な物品を寄贈することができたのは、支援してくださった方々のおかげです。皆さまの温かいご支援で団体の活動ができ、一つでも多くの命を守ることにつながります。改めて心から感謝申し上げます。

ありがとうございます。

4. 伴走支援制度について 【伴走支援制度を活用された団体のみご記入ください】

(1) 事業を実施した率直な感想を記載ください。

(2) 事業計画策定や業務進捗のモニタリング等の際に伴走支援者から受けた助言が本事業においてどのように役立ったか、具体的な事例があればご紹介ください。

(3) 上記2点を踏まえ、団体の成長となった部分や活動の成果、本事業を通じた学びや今後の方向性について記載ください。

ご記入にあたって

- ・本ファイルが使いづらい場合、本様式の項目にて、貴団体にて使いやすいワードファイルやエクセルファイル等で作成いただいて構いません。
- ・A4 サイズで 4~10 ページ程度の分量を目安に作成をお願いいたします。各記入欄の枠は適宜広げていただいて構いません。
- ・その他ご不明な点がございましたら、JICA 担当までお問合せください。

以上